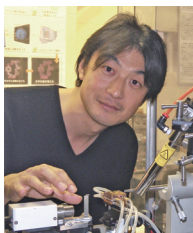


正解はわからない



永野修作

名古屋大学ベンチャービジネスラボラトリー
[464-8603] 名古屋市千種区不老町B2-3 (611)
准教授, 博士 (工学).
専門は機能性高分子, 高分子組織体, 高分子配向.
snagano@apchem.nagoya-u.ac.jp

www.apchem.nagoya-u.ac.jp/06-BS-2/sekilabo/index-j.html

駅に21時、いつもより早い。研究室を出てすぐLINEに電車スタンプと一緒に「帰る」と入れたが、既読の文字はない、遅いようだ…ネットスーパーの買い置きは肉モノに偏るので、今日は魚を買って帰る。大きいイサキが二匹、これも大きいアサリ、ニンニクも、バゲットかな？ パセリは冷凍したものがあるはず…フライパンにすべてを放り込んで火にかける、オリーブオイルと、白ワインがないから日本酒…余計に買ったネギトロ巻きを食べながら、そろそろ締め切りの「仕事と私事」…。友人の働き過ぎのY先生は、「我々の仕事って、仕事だか遊びだかわかんない部分あるじゃないですか?」と言う。確かに、大学の「仕事」は、戦略を自身で決めて、賛同者である(と願いたい)学生と戦術をひねり出して実行する。大発見とはいかないまでも、曲りなりにも人が考えなさそうな新しいことをひねり出す、「ゲリラ」的な研究が多いと自己満足しているが、産みの苦しみはある、それが嬉しい。しかし、高分子液晶を並べているが、表示素子を作りたいわけでもないし、イオン伝導の研究を取り入れたが、電池を作りたいわけでもない、正解はわからないので模索中だ。

電車スタンプが現れ、「ごめん」の文字、謝ることはないのに…プチトマトを突っ込んだものの、日本酒では風味がない。その辺の香辛料と調味料をパラパラして、えいっとワインビネガーをちょっと入れて完成? ベストは尽くした。レタスを切って、ポン酢とごま油をコップに入れて振りながら、テレビを見ていたら、玄関のチャイムが鳴った。帰ってきた彼女はアボカドを切りながら、今日あったことをいっぱいしゃべってくれる…彼女の話は、社長から部下まで、開発から営業、生産の人まで多岐にわたる登場人物が面白い。いろいろ考えているし、いろいろやりづらそうだし、いろいろ大変で、でも、楽しそうだ。同門の彼女は、私の研究もよくわかっていて、「学生と一緒にアゾベンゼンでフニフニしてるだけでしょ!」と揶揄する(「大学では研究以外の仕事のほうが信じられないくらい多いの!」と言

い返してはいる)。彼女は、フルタイムで働いている企業研究者で、イチから材料を開発、製品にして、現在、開発しながら売っている“仕事”をしている。それなりに売れているらしい、なので、家事は半分半分、いや、事実を認識するともっと私が、と言いたいところだが、私のほうが平均的に夜遅かったり、土曜日でも仕事があったりとひいき目でも3:7といったところである。

取っ手をとってフライパンのままテーブルに、ちょっと複雑な顔を浮かべたが「おいしい」と言ってくれた。悪くない味であることは確かなはず(うぬぼれた正解?)。食卓の話題は、年齢とともに上司や組織のことよりもほとんど部下や学生の話題である。彼女もこちらの世界ではまだ若手であるが管理職、部下の心配はつきない…。「先生」と呼ばれるのは嫌いだ、プロ意識がないと言われれば返す言葉もない。幸いボスや学生に恵まれて、転職後、その自覚なく10年以上も大学にいられている。科学者としてのキャリアの最初を担う「教育」の怖さを感じる反面、若い人たちと一緒に“研究”をする“仕事”を選んだ。しかし、仕事には“私事”が付き物で、その際、結局、彼女にもある大きな選択をさせてしまっている。10年以上経って、彼女も今の職に落ち着いて、さらにさまざまな選択を迫られて、かつての選択が正しいものだったのか? 未だに正解はわからない。ただ、できることはサポートしていきたいと常に思っている。

私たちは、学生にどのように映っているのだろうか? それでも、学生には男女問わずフルタイムで仕事を続けてほしいと願っている。教育者の端くれとしては、社会に影響できる能力がある以上、その能力を活かし続けるべきだと思う。“仕事”を続ければ、さまざまな選択、決断、葛藤がいくらでもあると思う。個人を尊重しあい、ゼロかイチか、両方か、妥協か、正解はないが、近づくことはできるはず。お互いをあきらめず模索してほしい。